

# 吉野川歴史探訪 吉野川第一期改修工事(その4)

## ～第一期改修工事の意義～

こんにちは。別宮川三郎です。事務所の前では、吉野川の水面いっぱいにスジアオノリの養殖がはじまっており、冬の景色に変わりつつあります。皆さん、風邪など引かないよう健康には気を付けて下さいね。

さて、吉野川第一期改修工事と題して、3回にわたり、高水防御工事計画意見書、善入寺島の遊水地化、吉野川直流化（別宮川放水路の整備）について探訪しました。

今月号は、吉野川第一期改修の最終回として、第十堰から善入寺島までの堤防工事、第一期改修工事がもたらした効果などについて探訪したいと思います。

### 1. 第十堰から善入寺島に至る堤防工事

第一期改修工事の主目的は、吉野川の直流化であり第十堰下流の別宮川を吉野川の本流とするために堤防整備、浚渫及び掘削を行うことでした。また、第十堰下流堤防の殆どはこの時に新しく造られました。(Our よしのがわ 10月号参照)

一方、第十堰から上流の堤防はどのように整備されたのでしょうか。第一期改修工事前の明治30年代の整備状況について、工事計画書である「高水防御工事計画意見書」には、「第十より上流の西覚円（石井町）に至る約6kmの間は、以前に改修を施した場所であり幅約700mで両岸に規則正しい堤防がある。西覚円より上流の堤防については、左岸は西条村（上板町）で切れている。また、右岸は霞堤になっており切れ切れに西林（阿波市）まで至っている。」と記載されています。吉野川では1860年頃まで小規模な不連続の堤防しかありませんでしたが、計画書に記載されている堤防は、幕末から明治中期にかけて急速に整備された堤防なのです。なお、第一期改修工事前の堤防位置は、明治34年の実測平面図に記載されていますが、堤防の形については、横断図が失われ大凡の高さしか分かりませんでした。しかし、昨年、藍畑村（石井町）周辺の第一期改修工事前である明治32年頃の実測平面図と堤防横断図が発見され、当時の堤防の形が明らかになりました。

(図1参照)

工事前の堤防の形は、高瀬橋上流南岸（右岸）7里0町（現在の距離標で18k0付近）で、高さが約7m、天端幅が約6m、堤防敷幅は約40mです。しかし、約220m下流の南岸（右岸）6里34町では、天端幅が約4mと狭くなっています。

少し話が逸れますが、7里0町は覚円騒動の原因となった明治21年7月洪水で決壊したところであり、阿波近古史談では、復旧工事は、金城鉄壁に比すべき程に堅牢に出来上がったこと。また、復旧堤防の高さについては、幕末の大洪水である慶応2年(1866)の洪水量に基づいて算定した高さに2尺を加えて30尺（約9m）としたことが記載されています。

なお、第一期改修工事における第十堰上流の堤防整備は、幕末から明治半ばに整備された堤防を嵩上げ、拡幅しました。嵩上げ高の考え方については、明治30年(1897)年9月の洪水位から約10尺(3m)を基準に一斉に嵩上げしたのです。例えば、高瀬橋上流南岸

(右岸) 7里0町では、図2のとおり、約2m嵩上げし、勾配は2割、居住地側には天端から12尺(3.6m)下がったところに、6尺(1.8m)の小段を設けました。第十堰から善入寺島までの堤防整備のうち、既設堤防を嵩上げ拡幅したところと新設堤防を築いたところを分類すれば図3のとおりとなりますが、多くの箇所では既設堤防を嵩上げ拡幅したことがわかります。

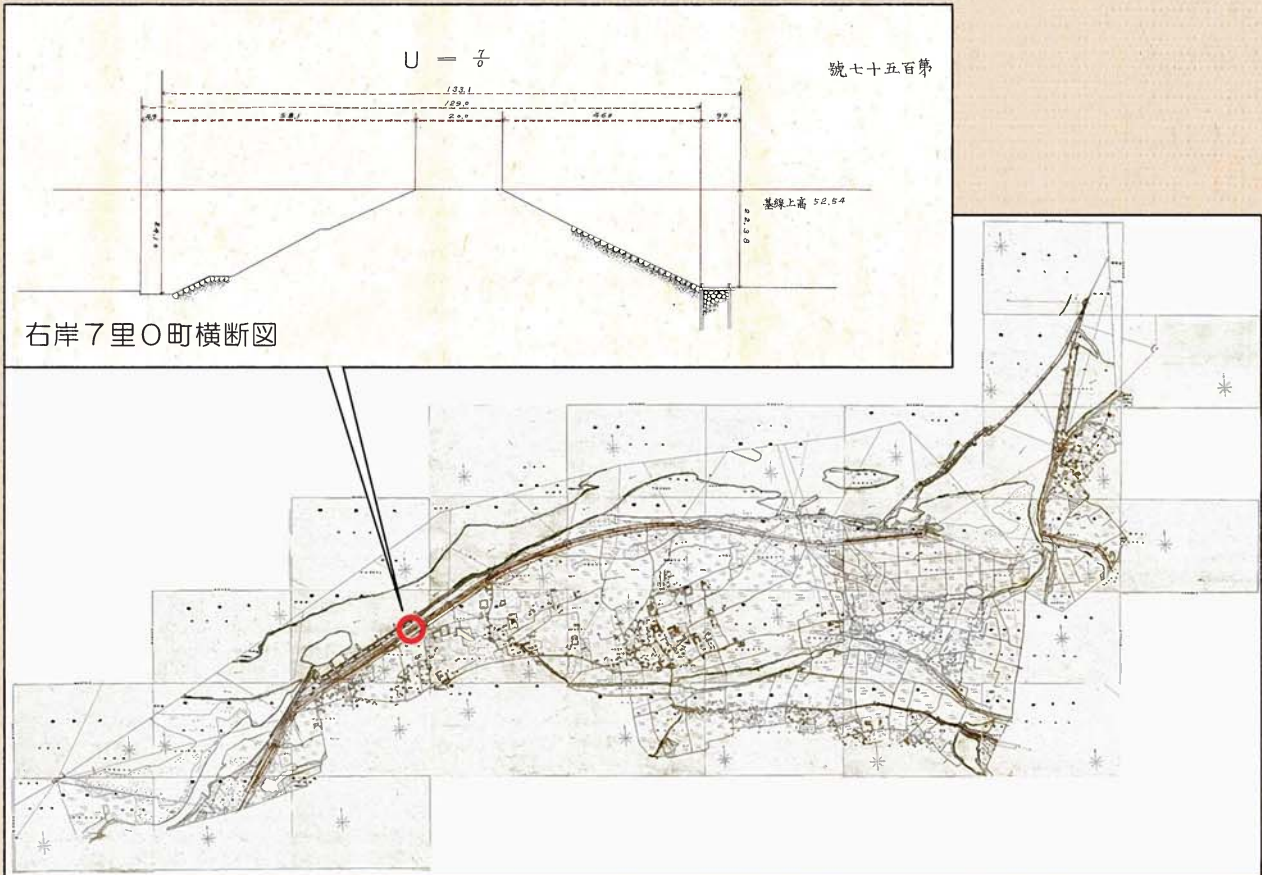


図1 藍畑村平面図 (明治32年)

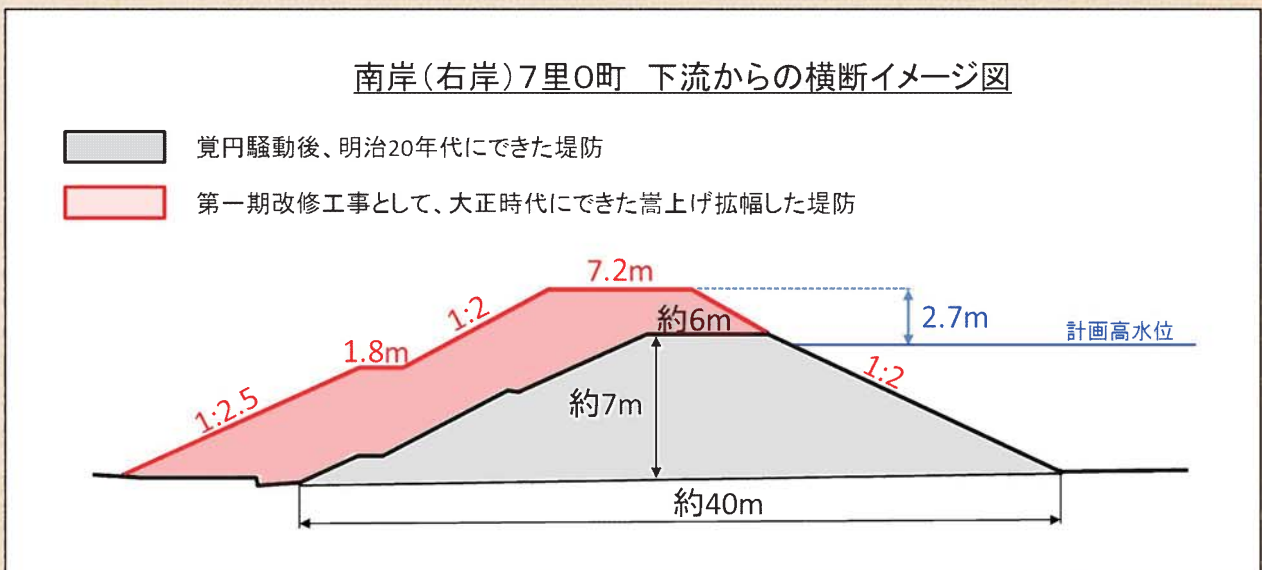


図2 右岸7里0町堤防嵩上げ拡幅イメージ図

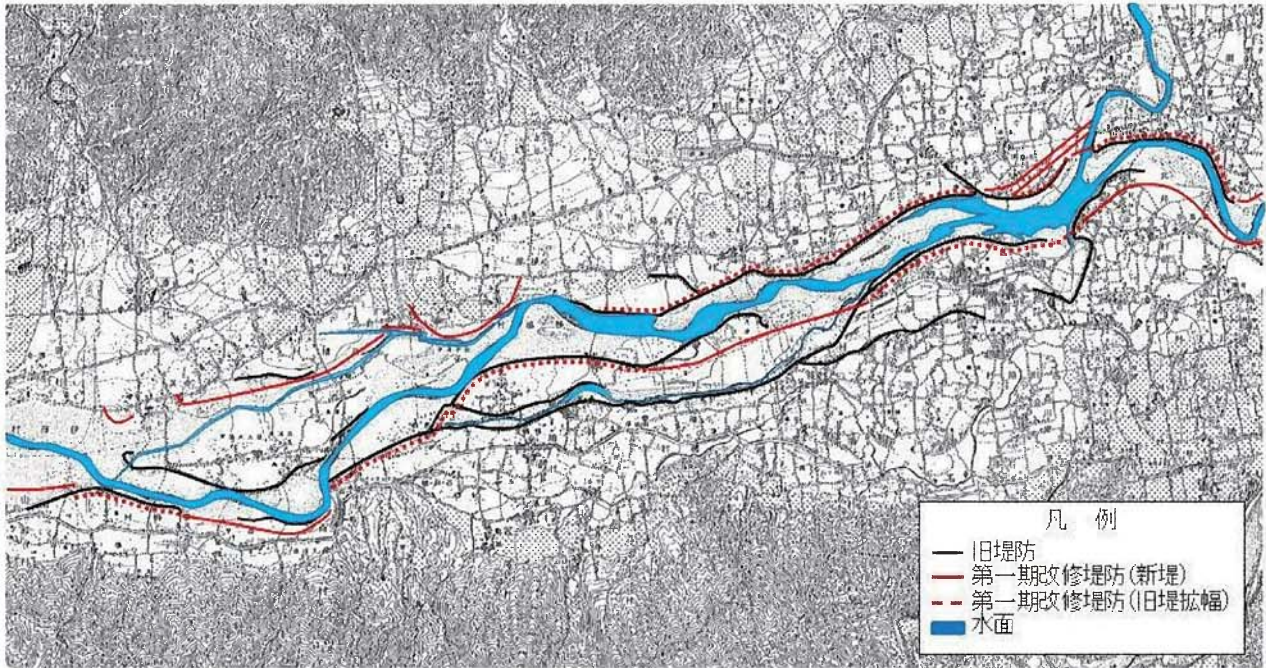


図3 明治29年陸地測量実測図（第十堰から善入寺島）に加筆

【参考：堤防に刻まれた治水の年輪】

今見る堤防は、全く白紙の状態から、ある時突然できたものではありません。吉野川の歴史は洪水と水害の歴史です。また、流域の産業や文化と密接に関連しながら、堤防は長い年月をかけて造られています。

第十堰から上流の堤防は、幕末から明治半ばにかけて造られた堤防を原型として、これまでに何度も嵩上げ拡幅を繰り返し現在に至っています。図3の平面図に第一期改修工事で造った堤防の位置を赤線で示していますが、そのうち、赤破線で示しているところが、それまでの堤防を嵩上げ拡幅した箇所なのです。

吉野川では、河川工事や道路工事のため、堤防を開削することが稀にあります。その際、堤防の断面について詳細に調査をしており、図4は調査結果の一例です。図のように堤防はいくつかの地層が重なり合っています。これらは、表1で整理した各時代における堤防築造・改修の歴史を表しており、いわば“治水の年輪”です。

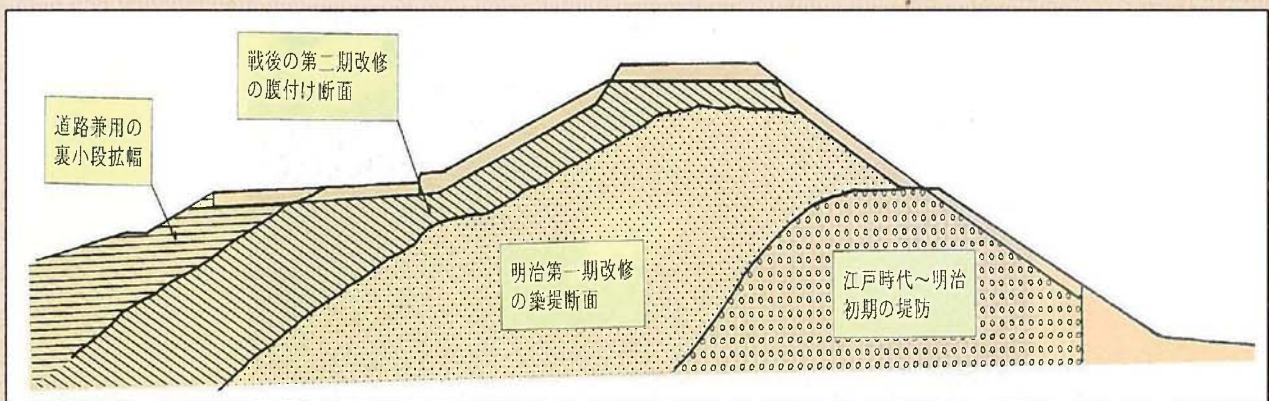


図4 堤防開削横断面図



表1 堤防築造の変遷

## 2. 日本一の大洪水国、今は太平樂を謳歌する大平野。

第一期改修工事は、別宮川本流化(吉野川直流化)を主として、岩津(阿波市)から河口までの40kmに及ぶ堤防整備、善入寺島の遊水池化等を実施しました。その計画は、明治35年に沖野忠雄博士等の日本人技術者により「吉野川高水防御工事計画意見書」として策定され、事業は日露戦争後の明治40年に着手しました。事業着手当初は、まず土地の収用から進め、工事は明治44年から実施しました。当初事業費は8百万円でしたが、その後の計画の変更や物価上昇により、最終的な総事業費は12百万円となりました。徳島県最大の土木工事であった第一期改修工事は、20年の歳月をかけて昭和2年に完成しました。現在、私たちが見ることができる吉野川の姿はこの時に整えられたのです。

吉野川第一期改修工事の完成を報じる「徳島毎日新聞」(大正 15 年5月8日)は、「日本一の大洪水国、今は太平樂を謳歌する吉野川の大平野」、「3,378,589 人の人の力で完成した眠れる緑の長堤 20 里」と大見出しを掲げました。ここには、徳島県民の吉野川第一期改修工事に向けた希望と喜びが示され県民の悲願であったことが理解できます。

その反面で見出しには「それでも自然は征服されぬ。洪水来が!!! 怖いのは改修前も後も同じ。これからは堤防の保護に水防の充実に沿岸民愛郷心の発露にまつ」と掲載

し、堤防が完成した後も、洪水に対する不安から堤防の維持管理と水防に対する地域住民の積極的な取組を期待しています。これは、堤防が完成した昭和初期の洪水に対する住民の危機意識が、現代を生きる私たちの世代とは大きく異なり、非常に高かったのではないかと思います。昨今、気候変動に伴う水害の頻発・激甚化をよく耳にします。大水害を減災するためには、大きな洪水氾濫は必ず発生するという前提のもと、水害を我がこととしてとらえ、社会全体で洪水氾濫に備えることができる「水防災意識社会」を再構築する必要があります。吉野川で言えば、大堤防が完成した昭和初期のような水防災への危機意識の再醸成に向け、皆さんと一緒に考えていく必要があると思います。

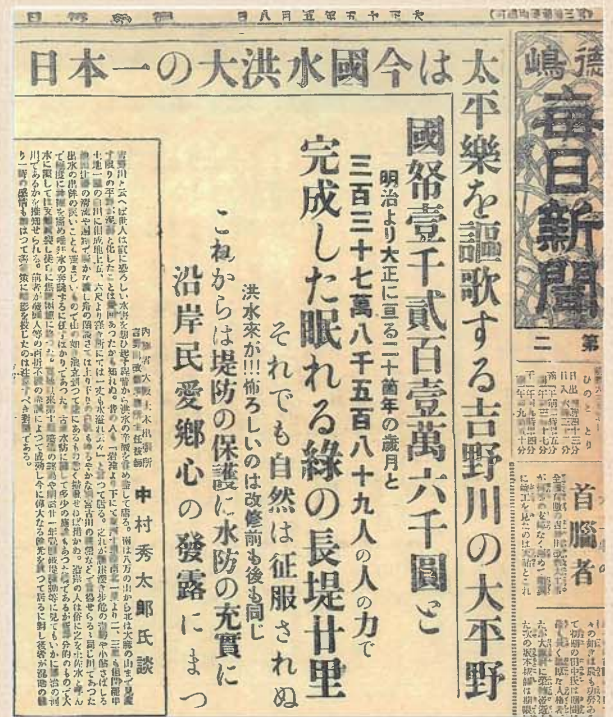


写真1 吉野川の堤防完成を伝える徳島毎日新聞 (大正 15 年5月 8 日)

### 3. 第一期改修工事の意義

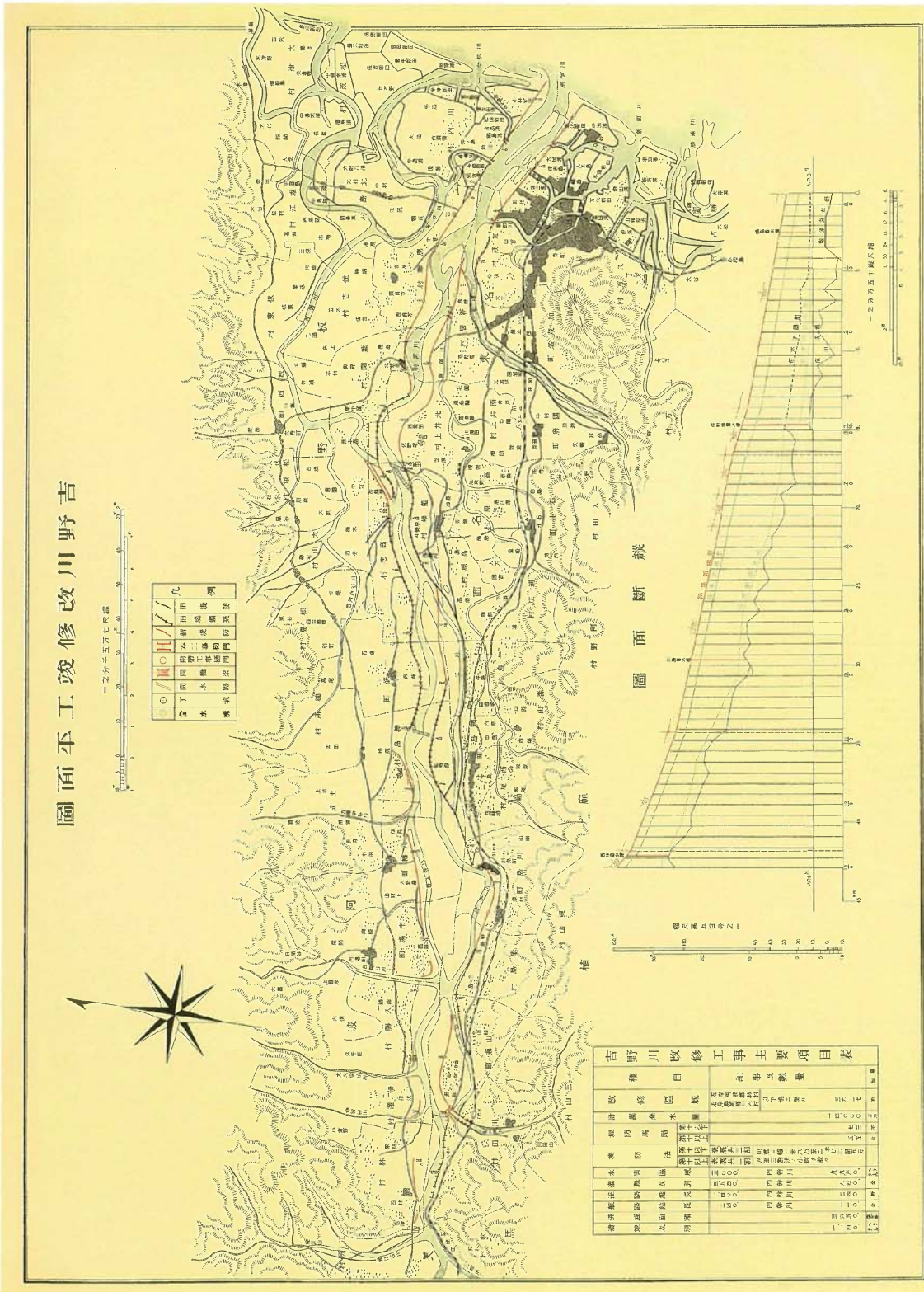
第一期改修工事の効果については、もしそれを一言でいうならば、現在の吉野川下流のすべてを決定した工事であると思います。吉野川の最も重要な幹川区間である岩津下流の全川にわたって、これまで探訪した根本的な改良工事を施工して、我々世代はもとより、将来世代に亘る非常に大きな遺産を残してくれた最初の大工事であったと同時に、おそらく今後このような大改修はあり得ないのではないかと思います。

徳島市をはじめとする吉野川下流沿川に堤防を築き洪水の氾濫を防止しました。また、第十堰下流吉野川(現在の旧吉野川)沿川の藍住町、北島町、松茂町及び鳴門市では、毎年のように深刻な水害に悩まされてきたが、別宮川の放水路化により吉野川の洪水被害から切り離され安全な土地になりました。

吉野川北部地域の発展は、吉野川の豊富な水、安価な土地を利用した昭和初めの工業誘致の成功が挙げられます。それも事実ですが、北部地域の洪水や水害に対する安全性を根本的に大きく向上させたことが最大の要因ではないかと思います。

北部地域は、その後も早明浦ダム completion による安定的な水の確保や更なる治水安全度の向上により、現在も徳島県人口が減少する中で、当該地域の人口は増加するとともに、産業集積地として発展を続けています。

この発展の礎となった吉野川の大堤防を引き継いだ私たちは、それぞれの立場で、少しでもより良くして、次世代に引継ぐ必要があります。



昭和五十八年五月八日に発行された吉野川改修工事の第一期改修工事の計画図(平面図)である。この図は、吉野川改修工事の第一期改修工事の計画図(平面図)である。この図は、吉野川改修工事の第一期改修工事の計画図(平面図)である。

図5 第一期改修工事平面図

今月号は、第一期改修工事(その4)として、第十堰上流の堤防整備、第一期改修工事の意義について探訪しました。創刊以降、治水を主に探訪しましたが、次号は利水について探訪したいと思います。